

## 10. 鼻副鼻腔粘膜におけるリンパ管の分布

越谷病院 耳鼻咽喉科

岩崎洋子, 山口晋太郎, 廣瀬 壯, 渡辺建介

【目的】鼻・副鼻腔粘膜から発生するポリープの機序の一部にリンパ管の働きが関与しているのではないかと考え, 鼻・副鼻腔粘膜の様々な部位におけるリンパ管の分布と, ポリープにおけるリンパ管の分布をリサーチした. また, 上顎洞癌がリンパ節転移をおこしにくいとされていることについても若干の検討を行った.

【対象・方法】副鼻腔の各部位につき, 検体を採取し1平方mmあたりのリンパ管の数と血管の数をカウントした. 鼻ポリープは後鼻腔ポリープ(上顎洞粘膜を基部にもつポリープ)とその他のポリープについて同様にリンパ管と血管の数をカウントした. また, 上顎悪性腫瘍の4例についてリンパ管の新生があるか, 病理学的に検討した.

【結果・結論】通常ポリープは, 上顎洞や篩骨洞, 篩骨胞表面などに基部がある. 一方下甲介や, 鈎状突起からは発生しにくい. 今回, 下甲介や鈎状突起は, 上顎洞や篩骨洞, 篩骨胞表面にくらべ単位面積あたりのリンパ管の分布が有意に多く見られた. このことは, ポリープの発生する機序にリンパ管の関与があることを示唆している. また, 上顎洞を基部とするポリープにはリンパ管がほとんど見られず, 上顎洞以外を基部にもつポリープと比べ有意にリンパ管の数が少なかった.

上顎洞に癌の浸潤を認めた4例の上顎洞粘膜で今回リンパ管の新生を認めたものは1例のみであった. 上顎洞粘膜・上顎洞に基部をもつポリープのどちらにもリンパ管が殆どみられなかったことから, 上顎洞内に原発した癌は, リンパ管がもともとなく, リンパ管の新生もしにくいためにリンパ節転移をおこしにくいと考えられた.

## 11. 上下肢のリンパ浮腫に対するリンパ管静脈吻合術

形成外科学

鈴木康俊, 朝戸裕貴

【目的】リンパ浮腫に対する治療として, 近年リンパ管静脈吻合あるいはリンパ管細静脈吻合など, リンパ管を直接操作してその流れを改善することができるようになり, 良好な治療成績が報告されてきている. しかしこれらの術式は, まだある程度スペシャリストとしての技術を必要とする. また吻合の手技的な問題の他, 吻合に適したリンパ管を術前にあらかじめ探すことが困難であり, 見つかったリンパ管と静脈が適切な位置に無いなどの問題が生じることがある. これに対して我々は, リンパ管静脈吻合を行う際に, 比較的太い静脈を選択してリンパ管を端側で吻合する端側型リンパ管静脈吻合術を行っており, 良好な結果を得ているので報告する.

【手術】2006年4月1日から2008年9月30日まで, 当科で手術を行なった上下肢のリンパ浮腫の症例22例を対象とした. 術前検査として超音波による静脈の同定, 手術時にはPDEによるリンパ管の描出を行なった. リンパ管動脈吻合は, 太い静脈の側壁に細いリンパ管を吻合する, 端側型リンパ管静脈吻合術を第一選択とした.

【結果】22症例において, 46回52箇所 of リンパ管静脈吻合術を行ない, 1皮切あたり1.7本のリンパ管吻合が可能であった. 22例中18症例で, 周囲径あるいは周囲径(%)の改善が得られた.

【考察】術前に超音波検査にて静脈を同定し, 手術時にPDEによりリンパ流を描出した. その交点となる部位からアプローチすることにより, 吻合に適した比較的太い血管とその近傍にリンパ管を数本, 容易に見つけることが可能であった. 端側型リンパ管静脈吻合術は, リンパ管と静脈の口径差に関係なく吻合ができる点で吻合操作がより容易であり, また静脈の血流を遮断しないため, 吻合部位でのリンパ管の開存とリンパ液の静脈へのよりよい流入効果において利点があると考えられる.

【結語】端側型リンパ管静脈吻合術は, リンパ浮腫における有用な術式である.